

# ◎ シリーズ 長岡京歴史散歩

104

中世の独楽  
 ～今も昔も子どもに人気～

鮮やかな朱色と墨で彩色された独楽は、平成5年に開田四丁目でおこなった開田遺跡の発掘調査で出土しました。鎌倉時代と戦国時代の建物や井戸、溝などが見つかっており、中でも井戸が多い点が目立ちました。当地の旧小字澤井は、湧き水が豊富なことに由来する地名と考えられ、文字どおり水に恵まれた集落であったと思われます。

独楽は、常にか水がしみ出す沼沢地の一面から出土しました。直径5・2cm、残存高3cm。逆円錐形で回転軸の先は切断されていましたが、上面の凹形に浅く削った部分と側面には轆轤ろくろによる鉋かんなの整形痕が残っていました。朱色は、変色することなく最上の赤色顔料とされる水銀朱を使用しており、樹種はヤブツバキの心材であることがわかっています。



▲独楽遊びのようす  
 『遊・戯・宴』広島県立歴史博物館展示  
 図録第8冊 平成5年より



▲開田遺跡の独楽



▲復元独楽と現代の独楽

中世の独楽は各地で出土していますが、中には伝承されていないと思われるものもあります。例えば、観応2（1351）年に制作された西本願寺所蔵の重要文化財『幕焔絵詞』巻5に描かれた独楽は、逆円錐形の胴内部を削りぬいており、内面には鮮やかな朱色が施されています（左上図）。この独楽は紐を掛けるための軸が上に突き出ていません。一見どのようにしてまわすのか考えてしまいますが、実は各地で出土する中世の独楽は軸を差し込んで指でひねる型式を除くと胴内部をくり抜いたものが主流です。

開田遺跡の独楽は、欠損した軸を復元することで現代によみがえりました。独楽遊びは、今も昔も子どもたちに人気のがん具として伝えられていくでしょう。